


## ■本資料のご利用にあたって(詳細は「利用条件」をご覧ください)

本資料には、著作権の制限に応じて次のようなマークを付しています。  
本資料をご利用する際には、その定めるところに従ってください。

**\*** : 著作権が第三者に帰属する著作物であり、利用にあたっては、この第三者より直接承諾を得る必要があります。

**CC** : 著作権が第三者に帰属する第三者の著作物であるが、クリエイティブ・コモンズのライセンスのもとで利用できます。

 : パブリックドメインであり、著作権の制限なく利用できます。

なし : 上記のマークが付されていない場合は、著作権が東京大学及び東京大学の教員等に帰属します。無償で、非営利かつ教育的な目的に限って、次の形で利用することを許諾します。

- I 複製及び複製物の頒布、譲渡、貸与
- II 上映
- III インターネット配信等の公衆送信
- IV 翻訳、編集、その他の変更
- V 本資料をもとに作成された二次的著作物についての I からIV

ご利用にあたっては、次のどちらかのクレジットを明記してください。

東京大学 Todai OCW 学術俯瞰講義  
Copyright 2012, 杉山清彦

The University of Tokyo / Todai OCW The Global Focus on Knowledge Lecture Series  
Copyright 2012, Kiyohiko Sugiyama

# 「正統」の歴史と「王統」の歴史

第10回 中央ユーラシアにおける世界観と歴史観

杉山 清彦  
東京大学教養学部

# 中央ユーラシアとは何か

## ◇中央ユーラシア Central Eurasiaとは

：ユーラシア大陸の乾燥域＝草原と沙漠とオアシスの世界

北に森林地帯、南に湿潤農耕地帯、境界に農牧接壤地帯

○草原＝遊牧(家畜群を管理・飼育しながら夏営地と冬営地を季節移動する生活形態)：騎射の軍事力

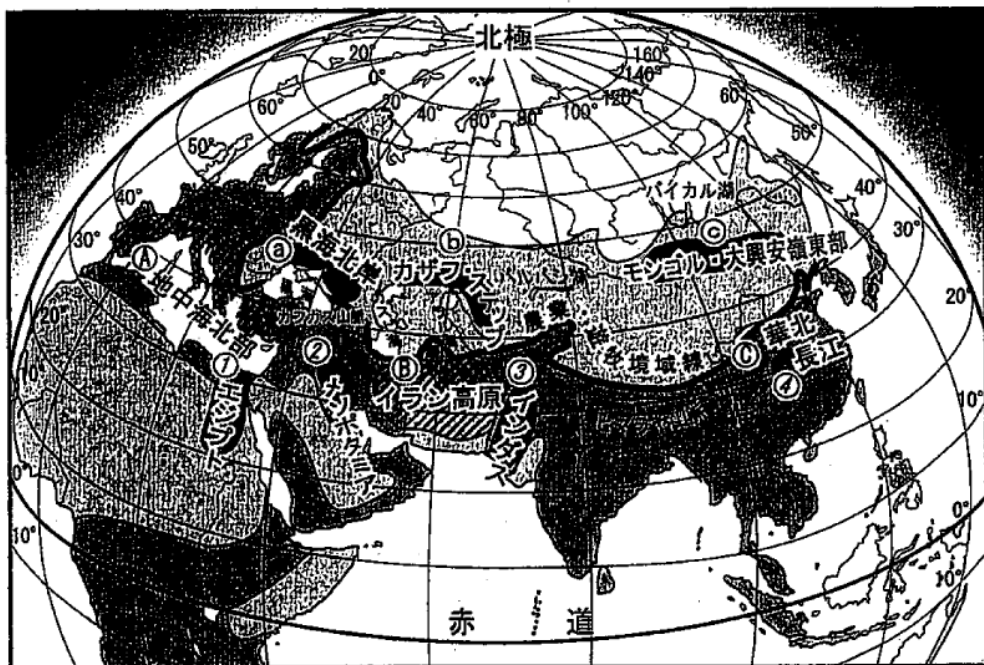
●オアシス(砂漠の中の可耕地とその広がり)

＝都市と農村：農業・商業・工業・宗教

・長距離商業：隊商

⇒遊牧民の活動を主軸に、それら相互、およびそれらと定住社会との関係の下に歴史が展開

# 中央ユーラシアとは何か



- ① 大河川流域の農耕地帯 (①②③④)
- ② 遊牧地帯 (㉑㉒㉓)
- ③ 農業・遊牧境界線の南に隣接する農耕地帯 (A③C)
- ㉑ 遊牧地帯 (ステップ・サバンナ) ㉒ 農耕地帯

ユーラシア大陸の環境と歴史 (妹尾, 2001年)

\* 妹尾達彦『長安の都市計画』講談社、2001年、p.24 図6

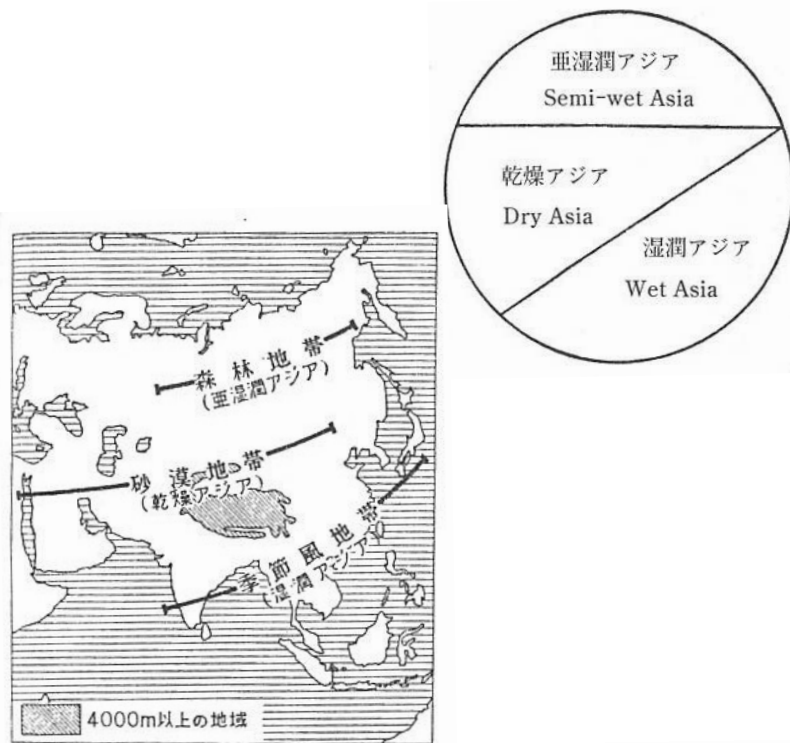


図2 三つのアジア(右)とアジアの三風土帯(左) (松田案)

\* 松田壽男『アジアの歴史』岩波書店、2006年、p.20 図2

# 中央ユーラシアとは何か

## <中央ユーラシア西部>

スキタイ～フン～マジャル・ブルガル

《イラン系・トルコ系》

↓↑

[アラブ系・イラン系・  
スラブ系社会]

## <中央ユーラシア東部>

匈奴～突厥・ウイグル・吐蕃～契丹～モン  
ゴル

《トルコ・モンゴル系、チベット、ツングース  
》

↓↑

[イラン系オアシス社会、  
漢人農耕社会]

# 草原世界の世界観と歴史観

◇「天(テングリ)」の信仰:草原の「天命」と「天子」

•“王権天授説”:君主の支配権=“天の靈威・恩寵”

「天の立てるところの匈奴大単于」「天より生まれし突厥の大カガン」

「とこしえの天の力のもとに」(モンゴルの勅令冒頭文)

•固有の伝承:王家始祖説話・民族起源説話 狼祖伝説

；シャーマニズム “天の靈威・恩寵”

•普遍の意識:普遍思想受容の柔軟さ=「天」という解釈

……仏教・マニ教・キリスト教・イスラーム

※強い系譜意識:現在の根拠として \*口承の伝統:系譜・史話・文芸

# 王統の観念と系譜意識

## ◇“王統”とその継受という観念

：Tu./Mo. *törö*, Ma. *doro*「政」= 支配権とそれを受け継ぐ血統

## ◎「チンギス=ハーンの天命」

・世界支配の「天命」：チンギス統原理 “黄金氏族”

：チンギスの子孫でなければハーンになれない

・『集史』（ラシード=ウッディーン編, 1310）

：モンゴル史（諸部族・モンゴル）・世界史（預言者・諸種族）

『五族譜』：ユダヤ・イスラーム・モンゴル・フランク・中国史

= 人類史の統合と分出：世界の諸地域・政体の総合

系譜への強い意識　：部族と君主の系譜を集成

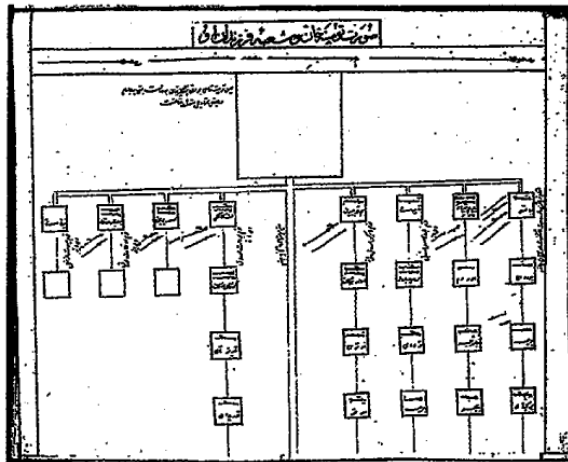
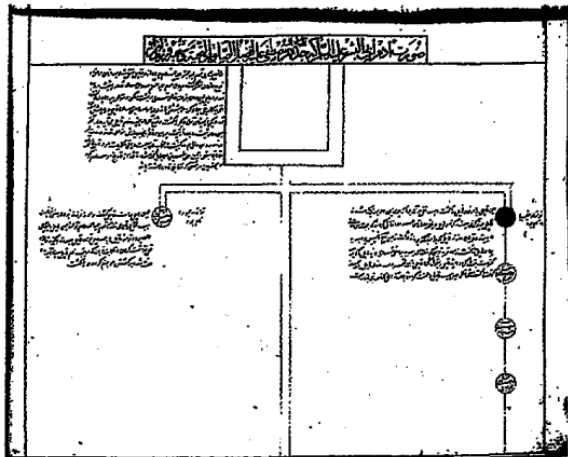


『集史』フランク史の最後のページ 左にローマ教皇、右にローマ皇帝が示される。左上からケレスティヌス5世、ポニファティウス8世、ベネディクトゥス11世。右は上がナッサウ家のアドルフ、下がハプスブルク家のアルブレヒト1世。トブカブ宮殿美術館図書館蔵



『集史』中国史の秦の始皇帝と漢の高祖 上段中央で仰臥するのが始皇帝。下段中央で横になるのが漢の高祖。英国王立アジア協会蔵





【五族譜】 上はアダムから始まるユダヤ史の冒頭。『旧約聖書』に相当する。二重の枠内にアダムの肖像が描かれるはずであった。下は第3番目のモンゴル王族の部分。チンギスの先祖にあたるどころから、トンビナイ・カンとその直接の子孫の箇所。各人物を示す小さな四角内には、上にウイグル文字、下にアラビア文字でその名が記されている。モンゴルの項では両文字が併記されるのが特徴。ティムール朝にはこのページが特別の意味をもっていた

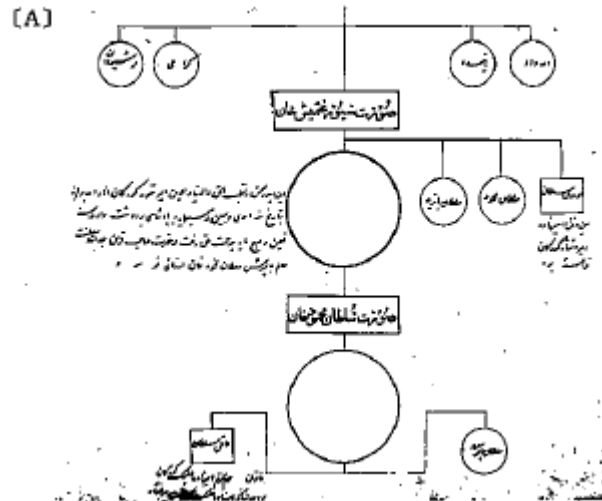


図1 『ムーイッズル・アンサーブ』に描かれる傀儡カンとむこ将軍ティムールおよびその正夫人 [A] 上半に大きく示されるのがソユルガトミシュ。4行にわたる傍注ではアミール・ティムール・キュレゲンの傀儡だったことが示されている。『ムーイッズ』パリ本44葉の表。

\* 杉山正明「チンギス・カンのイメージ形成—時をこえた権威と神聖化への道程」『生活世界とフォークロア<天皇と王権を考える 第9巻>』岩波書店、2003年 p.277 図1[A]

\* 杉山正明・北川誠一『大モンゴルの時代<世界の歴史9>』中央公論社、1997年、p.53

# 多元的世界観と歴史意識

◇多元的世界観：複数世界の並存 ←→「中華」の天下観

・「政」= 王統の並立

：チベット・モンゴル・マンジュ・漢地・朝鮮・日本etc.

・継受の観念 \*チベット仏教の流入 “三国世界観”

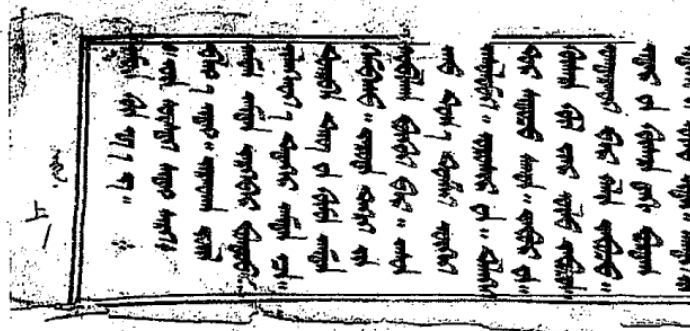
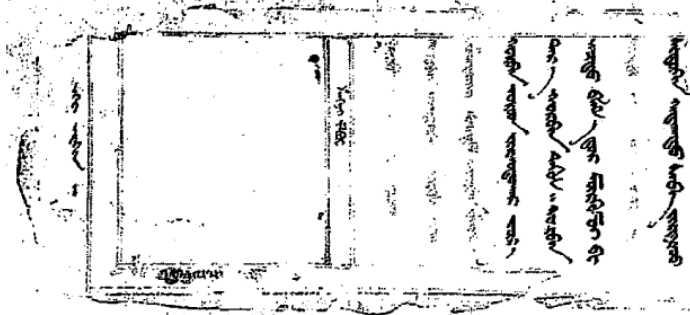
：インド→チベット→モンゴル(→マンジュ)

←→実体としての「中国」：Mo.kitad, Ma.nikan

：特別な価値を見出すわけではなく、「漢人と漢地」

※生き続ける／利用される歴史意識：チンギス=ハーン

\*ソ連崩壊とティムール、チンギス=ハーン



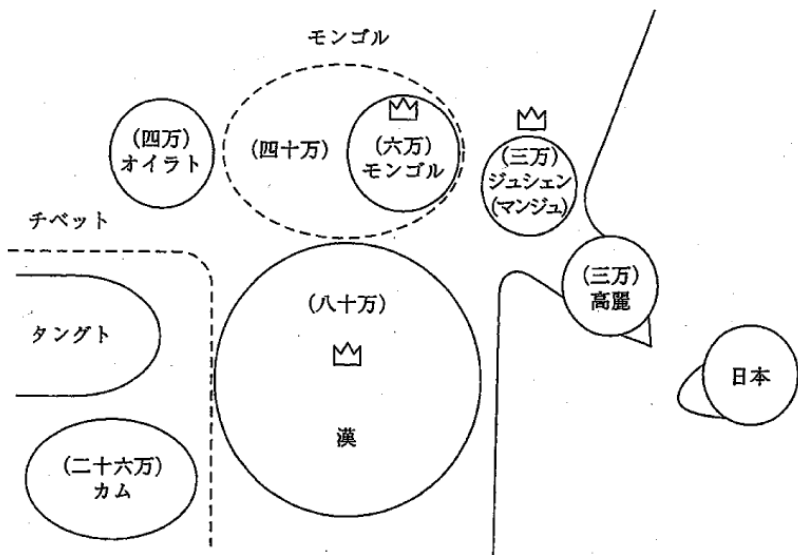
内蒙古社会科学院蔵『蒙古源流』写本二種

\* 森川哲雄『モンゴル年代記』白帝社、2007年、p.207

それなる順治皇帝は、戊寅の年(一六八三年)生まれで、七歳の甲申の年(一六四四年)に中国の大明皇帝の黄金の玉座の上に坐って、順治皇帝としてあらゆる方向に有名になって、南の八十万人の中国人、西方の終わりのカムの二十六万人のチベット人、北の四万人のオイラト人、東方の三万人の白い高麗人、中央の四省の満洲人、六万人のモンゴル人などを自分の力に入れ、あらゆる国人や部族のハーンたち、ノヤンたち、大臣たちに、王、ベイレ、ベイセ、公らというなどの称号を与えて、おのおの軽重の階級に従って恩賜して、きわめて大きな国人をはじめて治め、宝のような大きな政道を平和にした。

岡田英弘訳注『蒙古源流』刀水書房、2004年、p.338より引用。

『蒙古源流』満洲の王統・順治帝



多元的世界概念図:「政」とトゥメンによる秩序  
「万」=万人隊(トゥメン)によって集団を把握・表現する。

杉山先生ご提供画像

# 参考文献

岡田 英弘 1999『世界史の誕生』(ちくま文庫) 筑摩書房, 1999 (初版 1992)

2004 (訳注)『蒙古源流』刀水書房。

佐々木 史郎・加藤 雄三 (編)

2011『東アジアの民族的世界——近代以前における多文化的状況と相互認識』有志舎

杉山 正明 2006『モンゴルが世界史を覆す』(日経ビジネス人文庫) 日本経済新聞社 (原著 2002)

2008 (共著)『大モンゴルの時代』(中公文庫: 世界の歴史 9) 中央公論新社 (初版 1997)

2011『増補版 遊牧民から見た世界史』(日経ビジネス人文庫) 日本経済新聞社 (初版 1997)

妹尾 達彦 2001『長安の都市計画』(講談社選書メチエ) 講談社。

松田 壽男 2006『アジアの歴史』(岩波現代文庫) 岩波書店, 2006 (初版 1971)

護 雅夫 1967『遊牧騎馬民族国家 “蒼き狼” の子孫たち』(講談社現代新書) 講談社。

1976『古代遊牧帝国』(中公新書) 中央公論社。

森川 哲雄 2007『モンゴル年代記』(白帝社アジア史選書) 白帝社。